

科目名：キリスト教概論  
担当者名：山内志朗  
試験日：7/21、10:45～、516 教室  
資料作成者氏名：荒金彰  
資料作成者学籍番号：12000555  
注意点：自分の頭で考えること。

問 1:ユダヤ教とキリスト教の共通性と相違を整理し、ユダヤ教ではなくキリスト教が世界宗教となって世界史に大きな影響を与え続けている背景を説明せよ。

キリスト教とユダヤ教との共通点は、次の通り。（１）一神教であること。（２）契約思想：神と人間との間で契約がなされる点。（３）救世主思想：旧約聖書において国家を復興させるダビデと、人々を苦境から救い出すイエス。

キリスト教とユダヤ教との相違点は、次の通り。

- （１）選民思想の有無：救済の対象がユダヤ民族に限定されなくなったことで、民族を越えて多くの人々が救済への希望を持ち、信仰に至った。
- （２）律法至上主義の有無：神からの義認が律法の遵守にあるユダヤ教とは異なり、義認はただ信仰によるとキリスト教は理解した。

ユダヤ教では、律法を实践する（神殿に繁く通って供物を捧げ、安息日に仕事をせずに済み、穢れから離れて生活できる...等）ことのできる人々だけが救済の対象であった。しかし貧困層に律法の实践は不可能であり、富裕層しか救済を期待することができなかった。これに対してキリスト教では、人々はただ信仰によって救われるため、貧富にかかわらず救済の道が開けた。救済の条件が容易になったため信徒も増えた。（マタイ 11:30「私の軛は負いやすく、私の荷は軽い」）

- （３）イエスの十字架の有無

ユダヤ教では、罪を犯す度に神に捧げ物をしなければ、罪は赦されなかった。しかしキリスト教では、一切罪を犯さなかったキリストが、罪人として十字架にて犠牲になったことによって、人々の過去・現在・未来の一才の罪が赦されることになった。これによって救済のための手続きが簡素化され、人々は容易に信徒となった。

（１）～（３）で述べられた点によって、キリスト教は世界で多くの信徒を得、その結果世界史に大きな影響を与え続けている。

これとは別に、次のような説明もできる。キリスト教の神が実際に世界を統制する真の神であり、その教義がこの世界に適合しているため、その言葉に従うキリスト教徒たちが必然的にこの世界で拡散した。その地域の環境に適応している生物がその地域で広がるように、この世界に適応している宗教の信徒たちがその数を増したのは当然のことである。（狂信的なカルト集団が、長期にわたって世界に多くの信徒を保ち続けることはできないし、その事例はない。）

問 2:三位一体論について、なぜ理解しがたいものが世界宗教キリスト教の中心の正統教義になっているか、考察せよ。

神人論、救済論、贖罪論の観点から考察する。ただし 3 つは相互に密接に関連しているため、明確に分けて論じることとはできないと考えられる。

[神人論]（イエスが神であると同時に人間であるという三位一体論の中心的教義）

(1)イエスがもし神でなかったなら、彼は完全な存在でないがゆえに、へりくだり *humilitas* によって全ての人間の犠牲となって人間を救うことはできなかった（不完全な存在の受肉・受難は、*humilitas* ではないため）。ところがこれは信仰に反する。ゆえにイエスは神である。（背理法）

(2)イエスがもし人間でなかったなら、人間の肉体の形をとる受肉も、受動的に苦しみを受ける受難もなかったところになる。そして受肉や受難といったへりくだり *humilitas* がなければ、罪を背負う我々の救済もあり得なかった。ところがこれは信仰に反する。ゆえにイエスは人間である。(背理法)

(1)(2)ゆえにイエスは神であり人間である。

[救済論、贖罪論]「一切罪を犯さなかったイエスが罪に定められ十字架で裁きを受ける」という負の不条理によって、「罪を背負った人間が裁きを受けずに済むばかりか、神に嘉される」という正の不条理が成立する。これが非合理性と不可分なキリスト教の根本的信条である。神でありかつ人間であるイエスが十字架にかからなければ、人は救われないのである。イエスに伴った負の不条理(祝福に値する罪なきイエスが罪人の扱いを受ける)が強ければ強いほど、我々が伴うポジティブな不条理(祝福に値しない罪深い我々が、神のお気に入りとなる)も強まる。

キリスト教の根源は、償いにではなく贖いにある。

償い・贖罪：契約違反を、捧げ物によって解くこと。借金を返済する義務を履行したところでその人物は賞賛に値するわけではなく、マイナスを 0 に回復したまでのこと。これは、「眼には眼を歯には歯を」という等価交換の理念から生じる、合理的な正義の原理に合致する。

贖い：神が人となること・十字架にかかることで(イエスのみによって)可能。贖いは、応報の原理の上に成り立つ正義とは異なり、根拠なしに神が私の負債を帳消しにするばかりか私を贖ってくださる、という非合理的な原理に基づく。

この贖いを可能にするのが三位一体論である。「罪人の救済」というキリスト教の根本的信条を保持するために、三位一体論が出てこざるを得なかったのである。三位一体論は、通常の学問体系のように合理的な命題から演繹される形で出現したものではなく、むしろ非合理的な信仰の要請に基づいて捻出されたものである。まずはじめキリスト教は、合理性とは異質の「非合理的な恩寵」の原理によって定められ、後からそのキリスト教に適合するようにして、三位一体で用いられる *Hypostasis* や *Persona* 概念(これらはキリスト教のために作られた概念である)が定式化された。

従って、論理的に整合しているペラギウス主義などは、キリスト教の「非合理的な恩寵」と矛盾するものを導くために異端とされ、逆にキリスト教の「非合理的な恩寵」と合致する正統な教義は、また非合理的なのである。

つまるところ、元来合理的ではないキリスト教を、異端によって絶えず侵食されることから守るために教義化する必要が生じたが、うまく合理化できないものを合理化しようとした結果、三位一体論のような理解困難なものが生じたのである。ところがキリスト教が人々の心を動かしてきたのは、その「合理的正義を与えないところの慰めをむしろ与えるからこそ人々を癒す」という性質によるものであるのであって、合理的正義に基づく思想は、常に他者に何かを借りている存在である人間に対し、宗教的潤いを与えないのである。これが、キリスト教が世界の人々を動かし、同時にその中心に非合理的な三位一体論が措定されていることの、説明である。